

## 《紅樓夢》——その内なる軌み

小 濱 陵 一  
京 都 大 學

《紅樓夢》という魅惑の世界は、危くまっとうな生の軌道を踏み外しそうになった（幸か不幸か一部には踏み外してしまった）歴大な讀者達の存在によって何よりもはっきりと確認されようし、その感激を書き留めた詩詞や隨筆類に見られる意識的な捉え返しからより具體的な説明を提供されることもある。それらは《紅樓夢》を論ずる上で決して見逃せないものだが、一方作者がどのように作品に関わったかという問題については、資料の決定的不足という制約もあって、「書き方が上手」を越えることは困難であった。然し近年の曹雪芹に關する資料の發見、それらに基づく多くの研究者による考察は、少なくとも曹雪芹の《紅樓夢》に對する關わり方に固有の風貌を與えてくれるように思われる。ここでは「《紅樓夢》を書く」ことが曹雪芹に

とって如何なる意味を持ったのか——その根底を問いつめていきたい。

### I

曹雪芹の原稿として承認される前八十回について、その完成は大體のものに過ぎず、細かい箇所までは十分に手が入っていない、と俞平伯氏は指摘する。「本文の殘缺」から「分回の不定」に至る五つの具體例に對して異論は無いが、俞氏と同様の指摘をもっと別の角度から行なうことはできないだろうか。

「東魯の孔梅溪が《風月寶鑑》と名付けた」という本文に對して、《甲戌本》には次のような眉批が施されている。

雪芹舊有風月寶鑑之書、乃其弟棠村序也。今棠村已逝、余親新懷舊、故仍因之。<sup>(2)</sup>

雪芹には以前に《風月寶鑑》という作品があって、弟の棠村が序文を與えていた。今やもう棠村はこの世の人ではなく、私は新作を見て舊稿を思い、そこでこの題名はそのまま受け

ついだ。

この眉批によれば、曹雪芹には《風月寶鑑》と題する舊稿があったことになる。これを受けて胡適氏は、「この舊稿は一種のミニ《紅樓夢》だったのかも知れない」と述べ、<sup>(3)</sup> 俞氏もまた、「《風月寶鑑》は《紅樓夢》の雛形・舊稿である」と説く。<sup>(4)</sup>

では《風月寶鑑》は一體どのような内容を持っていたのだろうか？ 《甲戌本》に残る冒頭の脂批、《凡例》（別名《紅樓夢旨義》）には次のような解説がある。

又曰風月寶鑑、是戒妄動風月之情。

また《風月寶鑑》といったのは、むやみに風月の情を動かすことを戒めたのである。

更に第十二回「賈天祥とともに風月の鑑に照らす」に關連して、《凡例》には

《紅樓夢》その内なる軋み（小濱）

又如賈瑞病、跛道人持一鏡來、上面即鑿「風月寶鑑」四字、此則風月寶鑑之點睛。

賈瑞が病氣になって、びっこの道士が鏡を持って來たが、その表面には「風月寶鑑」なる四字が刻まれていたというのが《風月寶鑑》の要點である。

と記されているが、これらと當の第十二回の内容とを考え合わせてみると、胡氏や俞氏も推察するが如く、<sup>(5)</sup> 《風月寶鑑》の表看板は、「淫を戒める」ことであつたと考えられる。そして實際には俞氏が提起するように、「さんざん勸めてチョッピリ諷す」——「淫」のありさまを克明に描寫することに力が注がれたと言えよう。背後に働くものが因果應報の論理であれ、作者の個人的な悔恨や怨念であれ、その戒め切れない弱さの果てに、「いい思い」をした人間が廢疾者や罪人になったり、或いは慘死したり、富み榮えた家が抄没されたり、天災に遭つたりという形は、なぜか地上世界よりも遙かに成立し易い。また逆に人や家の慘めつたらしい最期を考えた時、それが淫行や貪財・横暴とい

った戒め切れない弱さと結びつき易いことも確かである。  
 とところで、現存する《紅樓夢》の中に《風月寶鑑》の殘稿と覺しき内容は一體どのような形で留められているのだろうか？

這《風月寶鑑》の舊稿保存在《紅樓夢》裏究竟有多少、固不得而知。依照《旨義》所謂「戒妄動風月之情」這個意義作爲標準、並參看有關的脂批、大約在本書（以八十回計）的前半較多、後半較少、却也未必沒有。<sup>(註)</sup> 賈瑞・鳳姐已關合這面作爲鏡子解釋的「風月寶鑑」、此外如秦可卿・秦鐘・尤氏三姊妹・香憐・玉愛、以至於賈珍・賈璉和多渾蟲的老婆、大概都是《寶鑑》中人物。這些當然是設想。

<sup>(註)</sup> 後回寫尤二姐・三姐另是一種氣氛、一種筆路。又第六十八回、鳳姐對尤二姐的一段長白、各抄本都夾雜文言、不像鳳姐平常的口氣、很不調和。這些都可能是《風月寶鑑》的舊文。<sup>(6)</sup>  
 この《風月寶鑑》の舊稿が、《紅樓夢》の中に結局どの程度保存されたのかは、もとより知ることはできない。《旨義》の「むやみに風月の情を動かすことを戒めた」という意義を

標準とし、關連する脂批を併せ見るならば、本書（八十回で勘定する）の前半に比較的多く、後半には比較的少ないが、然し全然無いわけではない。<sup>(註)</sup> 賈瑞・鳳姐は、鏡として解釋される「風月寶鑑」とすでに關わり合っているが、このほかでは秦可卿・秦鐘・尤氏三姊妹・香憐・玉愛、そして賈珍・賈璉・多渾蟲の女房までは、多分どれも《寶鑑》中の人物だろう。これらは當然想像だが。

<sup>(註)</sup> 後半の回での尤二姐・三姐の描寫は、違つた雰囲気・書きっぷりをもつ。また第六十八回の尤二姐に對する鳳姐の長いセリフは、どの抄本でも文言が入りまじつていて、鳳姐のふだんの口ぶりとは似ず、ひどく不調和である。これも《風月寶鑑》の舊文かも知れない。

「風月寶鑑」そのものと關わる賈瑞と鳳姐には改めて觸れない。秦可卿については、現存する《紅樓夢》に描かれるように病死したのではなく、舅の賈珍との不義密通の發覺を恥じて縊れ死んだというのがもともとのスタイルだったことが、第十三回の脂批や第五回で示された彼女に關する冊子の判じ繪<sup>(8)</sup>などを通じて認められている。「風月」の一

つので在り方・その行き着く果ての擔い手として、秦可卿の持つ意義は大きかったと言えよう。<sup>9)</sup> 秦鐘及び香憐・玉愛については

如今寶秦二人一來了、見了他兩個、也不免纏綿羨愛、亦因知係薛蟠相知、故未敢輕舉妄動。香玉二人心中也一般的留情與寶秦。因此四人心、雖有情意、只未發迹。

いま寶玉と秦鐘の御兩人、(家塾へ)やって来て彼等二人(香憐・玉愛)と顔を合ませますと、これはもう纏綿たる戀慕の情を抱くことは避けられませぬ。ただ薛蟠のお馴染みであることも承知しておりますゆえ、輕舉妄動は慎んでいる次第。一方、香憐・玉愛の兩人とて同じように寶玉と秦鐘に心を寄せております。従いましてこの四人、胸に想いを忍ばせながら、表に出さぬだけのこと。

という條が、彼等の何たるかを最もよく物語っているように思える。「風流を戀いて情友家塾に入り、嫌疑を起して頑童學堂を鬧がす」というこの第九回について、《有正本》

《紅樓夢》その内なる軌み(小濱)

の回末總評は

學乃大衆之規範、人倫之根本、首先悖亂以至於此極、其賈家之氣數即此可知。

學問は人々の規範、人倫の根本なのに、まずもって悖亂がこんな極點にまで達しているのだから、賈家の命運も察しがつ、くというもの。

と歎いているが、ここでの「悖亂」の原因は言わずと知れたことだろう。更にこの第九回には、賈蓋と賈蓉(或いは賈珍も)との間に怪し氣な關係があるようなことを匂わせた一節があり、<sup>10)</sup>《風月寶鑑》にあってはそうした關係もまた「風月」の現實として大きく取り上げられていたように思われる。その他俞氏の指摘した人物以外では、例えば秦鐘と關係を持つ智能兒が考えられよう。もちろん(原型としての)寶玉にも指を折らねばならない。また既に名前の出た薛蟠・鮑二の女房(多渾蟲の女房との類似)・柳湘蓮(秦鐘・薛蟠・尤三姐との絡み)などが擧がっている。<sup>13)</sup>

ではこうした賈瑞—鳳姐—賈珍—秦可卿—寶玉—秦鐘などの「風月」に對する結びほどのような形で示されているのだろうか。刪改された賈珍—秦可卿については最早窺うべくもないが、妖鏡と罵られて危く焼かれそうになった「風月寶鑑」はこう叫んでいる。

誰叫你們瞧正面了！你們自己以假爲眞、何苦來燒我。

(第十二回)

誰があなたたちに正面から見ろなんて言いましたノ そちらが自分勝手に假を眞と決め込んだのに、どうして私を焼いたりするんです。

また智能兒との一件がもとで父を失い、自分も病氣を重らせた秦鐘は寶玉に

以前你我見識自爲高過世人、我今日纔知自誤了。以後還該立志功名、以榮耀顯達爲是。(第十六回)

以前にはお互いに見識は世人の遙か上を行くなどと自負して

いましたが、今日になってやっと自分が間違っていることに気がつきました。これからは試験合格に志を立て、榮耀榮達をもってよしと下さい。

と言ひ残して死んでいる。ここでは叡氏等の指摘通り、「淫を戒める」という表看板——陥り易い「風月」という假に溺れて、險しい道のりが續く出世榮達・一族繁榮という眞を忘れては駄目ですよ——が生きていると言えようか。そして男女の醜聞に比重を置いて家の没落を把えようとするこうした通俗的な（アピールとしては最も説得力のある）姿勢は、紛れもなく《風月寶鑑》執筆當時の曹雪芹が自らの曹家に對して取ったそれであったと言えよう。この時期には、「家の崩壊」への問題意識を持ちながらも、その意識を彼獨自の方法で深化するまでには至らなかつたのである。

それでは現存する《紅樓夢》の段階になって、曹雪芹の姿勢はどのように變化したのだろうか。《庚辰本》の第十二回回末總評には次のように記されている。

此回忽遣黛玉去者、正爲下回可兒之文也。若不遣去、只寫可兒阿鳳等人、却置黛玉於榮府、成何文哉。故必遣去、方好放筆寫秦、方不脫發。況黛玉乃書中正人、秦爲陪客、豈因陪而失正耶。後大觀園方是寶玉寶釵黛玉等正緊文字、前皆係陪襯之文也。

この回突然黛玉を（揚州へ）行かせたのは、次回で可卿の文章を綴るからである。もし行かせなければ、可卿や鳳姐達を描くばかりで、黛玉を榮國府に放っておくことになって文章を成さない。だからどうしても行かせたのであり、それでこそ思いのままに可卿を描くの都合がよいし、書き洩らしたことにもならない。まして黛玉は書中の主人公、可卿は脇役である。どうして脇役のために主人公を忘れたりしようか。後の大觀園こそが寶玉・寶釵・黛玉等にとって最重要の文字であり、それ以前はすべて添え物の文章である。

ここでは《紅樓夢》の主要な舞臺は大觀園であることがはっきりと述べられている。<sup>70)</sup>大觀園の持つ意味については、「少女世界の日常的解體」という觀點から拙論を試みたことがあり、今再びそれに據れば、《風月寶鑑》から現存す

《紅樓夢》その内なる軌み（小濱）

る《紅樓夢》へ移行する際の曹雪芹の姿勢の變化とは、「解體したもの」を把える（「淫」のありさまをあれこれと描寫する）ことから、「解體してゆくもの」を把える（少女世界の崩壞を辿る）ことへの比重の變化と言えるのではないだろうか。<sup>71)</sup>

冒頭で、前八十回の完成は大體のものに過ぎないという指摘を、俞氏とは別の角度から行なうことはできないだろうかと述べたのは、實は作者のこうした姿勢の變化が、現存する《紅樓夢》にあつてはまだ完全には徹底していないと考えたからである。例えば、賈瑞や秦鐘が先に彼等自身の物語から抜き出した《風月寶鑑》の「結び」を越える役割を果たせないことは明らかだし、秦鐘と絡む際の寶玉の態度も、大觀園内のそれに何の抵抗も無く繋がって行くと言ひ難い。來るべき「家の崩壞」の暗示・伏線として、大觀園外の賈家の醜態を描くことも缺かせない（この點に《風月寶鑑》との連續性が保たれている）<sup>72)</sup>とは言え、《紅樓夢》全體の流れから浮き上がった感のある賈瑞や秦鐘の風月物語は、作品が最終回まで書き繼がれたその後で、改

めて検討の對象となつたのではないだろうか。(もちろん最終回までの一應の定稿化すら果たせぬまま曹雪芹は亡くなったのだが)。

ともあれ買家の亂れ切つた實態を單純に描くのではなく、その中に清淨無垢の世界——大觀園を核として設定し、その日常的解體の行き着く果てとしての買家そのものの完全な崩壞に筆を進めていくことが、《紅樓夢》に於ける曹雪芹の狙いだったと言えよう。そこには「家の崩壞」(それは一個の世界の崩壞である)の重みを自分自身の根源的な課題としてまともに扱え始めた曹雪芹の創作態度が窺える。未完に終つたことは惜しまれるものの、現存する《紅樓夢》が《風月寶鑑》の殘稿を「痕跡」として留保していることよつて、逆に彼の創作活動の質的飛躍を動態として確かめられるのである。それではその質的飛躍の内容、すなわち「家の崩壞」というストーリーの中に彼が沈め込んだものは一體何だったのだろうか？

## II

林黛玉と薛寶釵——既に餘りにも多くの人々によつて論じられてきたこの二人、やはりそれだけ重要な登場人物ではある。《紅樓夢》を書くということが、曹雪芹自身にとつて如何なる意味を持っていたのかという問題の答えを探つていくに際しても、この二人の少女の何たるかを見極める作業は避けて通れそうにない。

買家に寄寓するこの二人の根底的な相違點とは何か？それは器量でも才知でも性格でもない。ましてや讀者の腦裏に幻のように浮かび上がる二人のシルエットでもない。「買家に對する生活(經濟)上の依存度」こそがそれである。周知の如く、黛玉が揚州に残してきた父をも失つて(第十四回)孤兒となつてしまつたのに對し、寶釵の方は母が健在であり、てんで頼りにならないにしても兄までいた。しかも豪商薛家は、買家に寄寓することになつたものの、それはひとえに親戚としての好みからであり、「日々の生活費はすべて自前で」(第四回)を同居の條件として自分の

方から持ち出せるほどに裕福なのである。つまり、買家に對して黛玉は全面的に依存し、寶釵の方は對照的に全く依存していなかった。然し重要なことは二人の間にこのような根底的な相違があるということではない。その相違を黛玉が自らの負性としてはっきりと認識していたこと——それこそが重要なのである。（一言附け足しておけば、二人のその相違を黛玉が自らの負性と自覺していることに、寶釵とて氣づいていないわけではない。寧ろ他の誰よりも深い理解を示していると言える。）

（黛玉歎道……）你方纔說叫我吃燕窩粥的話、雖然燕窩易得、但只我因身上不好了、每年犯這個病、也沒什麼要緊的去處、請大夫、熬藥、人參肉桂已經鬧了個天翻地覆；這會子我又興出新聞來、熬什麼燕窩粥。老太太太太鳳姐姐這三個人便沒話說、那些底下的婆子丫頭們未免不嫌我太多事了。你看這裏這些人、因見老太太多疼了寶玉和鳳丫頭兩個、他們尙虎視眈眈、背地裏言三語四的；何況於我、又不是他們這裏正經主子、原は無依無靠、投奔

《紅樓夢》その内なる軌み（小演）

了來的、他們已經多嫌着我了、如今我還不知進退、何苦叫他們咒我。」寶釵道：「這樣說、我也是和你一樣。」黛玉道：「你如何比我！你又有母親、又有哥哥、這裏又有買賣地土、家裏又仍舊有房有地、你不過是親戚的情分、白住了這裏、一應大小事情又不沾他們一文半個、要走就走了。我是一無所有、吃穿用度、一草一紙、皆是和他們家姑娘一樣、那起小人豈有不多嫌的。」寶釵笑道：「將來也不過多費得一分嫁妝罷了、如今也愁不到這裏。」

（第四十五回）

あなたは今しがた燕窩粥を食べるようにと仰有つて下さいましたが、燕窩は手に入れ易いとしても、私は體が丈夫ではないので、毎年こんな病氣に罹り、何のとりわけひどい所も無い癖して、やれ先生、やれ藥煎じ、やれ人參だ肉桂だど天地もひっくり返らんばかりの騒ぎを仕出かしてまいりました。それを今回またもや新手を編み出して燕窩粥とやらを煮ることになりますと、おばあさま・おばさま・鳳ねえさんの御三方は何も仰有らなくても、あの下働きの女や女中達ともなれば、世話が焼ける奴だと嫌がらずにはおかないでしょう。



ほら、こちらのこういった人達って、おばあさまが寶玉さんと鳳ねえさんの御二人を可愛がられるのでさえ、虎視眈眈として陰では何のかのと言ってるでしょ。まして私などこちらのちゃんとした主人でもなし、もともとどこにも頼る所が無いので轉がり込んで来た人間ですもの。あの人達はとくに私のことを嫌がっていますのに、今またもや私が身の程知らずのことをして、どうしてわざわざあの人達に私を呪わせるなんてことしましょうか。(黛玉)

そう仰有るのなら、私だってあなたと同じことですわ。(寶釵)

あなたがどうして私などと比べられましょう。あなたにはお母様もお兄様もおいでになるし、こちらにも御商賣や土地を、お郷里にも相變らず家屋敷や土地をお持ちじゃありませんか。あなたは親戚としての義理からこちらに住まわれたに過ぎず、大小を問わず全ての事柄についても一文たりともこちらの御世話にはなっていないのですから、思い立てばすぐにお出になられます。この私だと、自分のものなんてまるで無し、衣食日用品、草木の一本紙切れ一枚に至るまで、みんなこちらのお嬢さん方と一緒にですもの、あのおつまらぬ連中が

嫌がらない筈はありませんわ。(黛玉)

先々嫁入り道具が一人餘計に嵩むだけのこと。今ここで心配したって始まらないわよ。(寶釵)

實はこの箇所は、「蘅蕪君蘭言もて疑癖を解く」(第四十二回)——「雜書を讀んではいけません」との寶釵の忠告に對して黛玉が心中祕かに感服した條を引き繼ぐ形で、「金蘭の契互いに金蘭の語を剖く」——二人がお互いに心をうち割って語り合い、理解し合った場面である。齒噛みしようとうと安堵しようとするのは讀者の好みの問題だが、さてそうした相互理解が買家に於ける二人の立場の相違を少しでも解消できたかと言えば、そのようなことは決して無かったと答えざるを得ない。生活上の一コマ一コマにあつては、個人の善意とか理解とかいったものも確かにそれなりの重みを持っている。「困ったことがあつたら何でも打ち明けたい、燕窩も私の家から届ければ手間が省ける」と言う寶釵の善意と、「そのお心遣いこそが有難い」と答える黛玉の感激とは、共にお互いの素直な氣持に相違ない。然

しこの二人の場合にしても、個人的な意思ではどうしようもない情況に立たされざるを得ないのである。黛玉の心の底からの訴えに對して、「嫁入り道具が一人分餘計に嵩むだけのこと」と茶化してしまうのはそうとしか言い様の無い寶釵の辛さなのだが、それは或る意味で「理解」なるものの限界を露呈していると言えよう。そしてこの二人にடுத்து象徴的な事件となつたのが「大觀園抄檢」(第七十四回)であつた。

(鳳姐) 因向王善保家的道：「我有一句話、不知是不是要抄檢、只抄檢咱們家的人、薛大姑娘屋裏斷乎檢抄不得的。」王善保家的笑道：「這個自然。豈有抄起親戚家來。」鳳姐點頭道：「我也這樣說呢。」一頭說、一頭到了瀟湘館內。黛玉已睡了、忽報這些人來、也不知爲甚事。

(鳳姐は) そこで王善保のかみさんに「一言話があるの。どんなものかしら、取り調べるにしても、ただうちの者だけにしましょうよ。薛のお嬢さんの所はどうしたって調べるなんて出来ないわ。」

《紅樓夢》その内なる軋み(小濱)

王善保のかみさんは笑いながら

「そりやもうごもつともで。どうして親戚のお宅まで調べたりしましょうか。」

鳳姐はうなずいて

「私もそう言いたかつたのよ。」

と話をしているうちに、瀟湘館までやって來ました。黛玉はもう寝んでいたのですが、これらの人達がやって來たと突然知らせを受けて、どういふことなのか見當もつきません。

事は春囊に端を發した侍女の持ち物改めであり、形の上では姉妹達と關わりは無い。然し探春や惜春の例を見てもわかるように、實際は彼女達にとつても重大事件である。蘅蕪苑が對象から外され、瀟湘館の方は何の抵抗も無く含まれる時、寶釵はあくまでも「薛家の人間」と看做されるのに對し、黛玉の方は「賈家の中の林のお嬢さん」としか扱われていない。もともと賈家の侍女とは言え、紫鵲が持ち物改めを受ける光景は、「林」としての黛玉の孤立感を際立たせ、彼女が林家の人間でありながら賈家に組み込ま

れているという二重性を浮彫りにする。(もちろん孤兒となつて身を寄せる黛玉を他の人々が買家の一員と看做しても、そこには何の作意も無い。また二重性の自覺は他の人の作意の有無をその本質とはしていない。)現存する《紅樓夢》には當該箇所は見當たらぬようだが、蘅蕪苑だけは「抄檢」を免れたと知れば、買家の中で自分の立場について黛玉は改めて深い傷を負わされたのではないだろうか？ 寶釵自身の意思とは關わりなく、彼女の買家に於ける在り方そのものが黛玉の自覺する負性に裏附けを與えてしまうことは十分推測できる。寶釵はこの「特例」の後味の悪さから、母の病氣を口實として大觀園を出てしまふ(第七十五回)のだが、それこそ黛玉の言う「思い立てばすぐに出来る」彼女の立場を鮮明にしよう。そして「抄檢」に際して全く買家の成すがままに終つたことに反撥したとしても、實際には「出るに出来ない」黛玉の立場が、その陰の部分<sup>23</sup>を形造っていることは言うまでもない。(二人のこのよ<sup>24</sup>うな對照的相違は「金玉縁」ではなく、寧ろ「護官符」を通じて、寶玉との結婚問題にも色濃く影を落としている。)

自らの存在の二重性なるものを、黛玉の場合には、林家の人間が買家に組み込まれるという、言わば「外的」強制力によって自覺させられている。そしてその對極には、薛家の人間が買家の中に單に混じり込んでいるというに過ぎない寶釵が存在している。買家に寄寓する親戚という同一條件下でありながら、一方は何ら損われることなく、他方は自らの負性を抱え込まざるを得ない——その構造はおそらくストーリー自體の展開にとつては、一人が「金蘭の契」を結んだことほどに目立ちもしないだろう。然しこの二重性の自覺はストーリーを展開させる原動力、創作の根本原理として《紅樓夢》の中に沈め込まれているのではあるまいか？ そのように思わざるを得ないのは、史湘雲・香菱・平兒といった、境遇から言えば黛玉と同等或いはそれ以下の人物が、主人公黛玉に決定的に及ばない理由をこの點に見出すからであり、また黛玉とは全く別の次元で、自らの置かれた立場について自覺的な人物が存在するからである。しかも彼女は、「家の崩壞」そのものとまともに關わり合つ中で、自らの二重性と對峙しなければならな

った。その人物こそ賈探春に他ならない。

### III

黛玉と探春に大きな繋がりを持たせて論じることが、從來認められてきた「黛玉―寶釵」という對の觀念からすれば、何かしら異様な斬り込み方と映るかも知れない。然しその方向性はともかくとしても、探春は黛玉と同じ程度に重要な人物である、と指摘した先人が全く無かつたわけではない。《古典文學研究資料彙編『紅樓夢』卷》には、例えば次のような評論が收められている。

探春者、《紅樓》書中與黛玉並列者也。《紅樓》一書、分情事・合家國而作。以情言、此書黛玉爲重；以事言、此書探春最要。以一家言、此書專爲黛玉；以家喻國言、此書首在探春。……書中敘探春爲趙姨娘所生、其母女黨齟不同、攝理家政、洞悉利弊、事不果行、而身悲遠嫁云云、一以正王夫人之罪、偏護私家、信任奸鳳、以致兩府俱敗；一以痛孤臣孽子、抱負奇才、或身不見用、或用之

《紅樓夢》その内なる軋み（小濱）

不專、終無益於家國也。作者以小喻大、於探春一身寓此書千古興亡無限感慨在內。……若探春爲王夫人親生、王夫人必信之不疑、相李紈辦事、李氏之肅穆和雍、濟之以探春之剛毅果斷、才德兼施、賈氏之家政其能敗乎？惟其不令嫡出、又不爲周氏所生、獨於衆人皆曰可殺之趙姨娘而令生此女、使之徒負奇才、雖衆知其能、而信任終不能專、見用終不能久、遠嫁而去。遠嫁者、遠謫之謂也、明方正之不容也、……<sup>24</sup>

探春は《紅樓夢》の中で黛玉と並ぶ人物である。《紅樓夢》は情と事とを分かち、家と國とを合わせて作られているが、情から言えば黛玉が、事から言えば探春が最も重要であり、一家庭から言えば黛玉が、家を國に喩える點から言えば、探春が主人公になる。……書中に、探春は側室趙氏の生んだ子であること、この母と娘が悪玉と善玉として相容れないこと、探春は家政を代行し、事の利弊を知りぬいていたが、十分に手を下せぬままその身は遠方に嫁ぐという運命に泣かねばならなかったこと云々と敘述しているのは、一つには王夫人の罪、つまり自分の實家ばかり守ろうとしてよこしまな鳳姐を信任し、擧句の果てに寧榮兩府共にダメにしてしまったこと

を正したのであり、一つには孤臣や庶子が奇才を抱くの用いられなかったり、或いは彼を用いても専らにせず、結局家や國のプラスとならないことを痛んだのである。作者は小を以て大に喩えた、つまり探春という一人物に、この書が千古の興亡から来る無限の感慨を秘めていることを寓したのである。……探春が王夫人の實子だったら、王夫人も必ず彼女を信じて疑わずに李執を助けて仕事をさせたことだろう。李執は肅穆和雍、これを剛毅果斷の探春が補佐すれば、才と徳を一緒に施すことになるから、賈氏の家政がどうしてダメになろうか？ 思うに嫡出にせず、周氏が生んだことにもせず、誰もが「殺っちまえ」と言う側室趙氏が生んだことにし、無駄に奇才を抱かせているから、皆がその才能を認めているのに、結局は全幅の信頼を置いてもらえず、用いられても長続きせず、遠方に嫁ぎ去るのである。遠方に嫁ぐとは遠謫を意味し、方正の入れられぬことを明らかにしている。……

どうしようも無い實母趙氏を抱えた庶子探春が、御家の爲に奸悪な鳳姐を斥けて手腕を發揮するが、結局は遠方へ去らねばならない——西園主人の描いて見せるこの構圖の力

點は優れた庶子の悲哀に在る。それは即ち探春が嫡出子でないことへの歎息であり、更に血筋や地位から来る制約を全く踏み外した鳳姐の利己的行動に對する憎惡にも繋がっている。とすれば、「悲劇の忠臣↓君側の奸臣」への歸着も領けなくはない。

ところで「中興者」としての探春に好意的なこの構圖を轉倒した時、そこには次のような論理が出現する。

探春和趙姨娘雖是母女、感情却格格不入、她爲了維持自己貴族小姐的尊嚴、根本不認當小老婆的趙姨娘爲自己的生母、而是千方百計向王夫人和王熙鳳一黨靠攏。她潑辣的性格和殺伐決斷的能力、連王熙鳳都承認比自己「更厲害一層」、所以才被取中當上了管家婆。李執是王夫人的一大兒媳婦、請李執主持內政、可以利用她年青守寡這種爲封建禮教獻身的「精神」、爲賈府衆人樹立一個「榜樣」、起到毒化奴隸和叛逆者的思想、緩和一下賈府的各種矛盾的作用。

探春と趙姨娘は娘と母の間柄ながら、仲がしっくりせず、彼

女は貴族のお嬢さんとしての自分の尊嚴を維持するために、側室の趙姨娘が自分の生母であることを全く認めようとせず、百万手を盡くして王夫人・王熙鳳一派に近寄っている。彼女があくどい性格と情容赦の無い決斷力は、王熙鳳ですら自分よりも「もつときつい」と認めているが、それゆえにこそ家政切り盛り役に拔擢されたのである。李執は王夫人の長子の妻だが、李執に切り盛りを請うたのは、若くして後家を通すという封建禮教に身をささげた彼女の「精神」を利用して、賈府の人々に一つの「手本」をうち立て、奴隸と叛逆者の思想を毒殺して賈府の様々な矛盾を緩和する作用を起こすことができるからである。

この兩者を比較して氣がつくことは、探春及びそれに伴う趙姨娘・李執に對する評價は眞二つに割れながら、不思議なこと鳳姐に關しては一致してマイナスの評價を下していることである。別の言い方をすれば、探春は鳳姐に反撥したのか、それとも彼女を引き繼いだのかという點で兩者は全く相反した見方を取っている。黛玉の二重性を考察するに際して寶釵を對極として取り上げたように、探春の

《紅樓夢》その内なる軌み(小濱)

場合にも、家政切り盛りの前任者鳳姐の持つ意味を把握することは重要である。鳳姐の把え方次第では探春の持つ重みも見失ってしまうだろう。

鳳姐は實に多くの事柄に關係している。その活動範圍の廣さによつて物語の面白さを増幅させる點で彼女の右に出る者は無い。口利きもすれば(第十五回)、高利貸もする(第十一・十六・三十九回)といった具合に蓄財の腕前も仲々だし、賈母や王夫人の御機嫌取りにもソツがない。話の巧さも拔群で、彼女が笑い話をする<sup>28</sup>と聞くと誰もが騙けつけて來る始末(第五十四回)。家政の切り盛りぶりも、寧國府へ乗り込んだ條(第十三回)に集中的に表現されるように見事なものである。また悋氣の程も第一級で、誤つて平兒を打擲したりもした(第四十四回)が、これについては尤二姐を自殺に追いやつた一件(第六十八、九回)が餘りにも生々しい。

鳳姐のこうした數々のエピソードについて面白がったり非難したりするのは各人の自由である。然し、これらに對する是非の論評を積み重ね、組み合わせたなら、そこに鳳

姐の持つ意義が立ち現われて来るのだろうか？ 彼女の個人的性格や行動そのものに幻惑されると、買家に於けるその在り方に對して歪んだ評價を與えてしまうのではあるまいか？ 私見によれば、彼女はよこしまだとか抑壓者だとかいう性格づけは本當はどうでもいいことである。「家の崩壊」そのものとまともに關わり合ってきた——ただそのことだけが鳳姐を規定する。

你知道我這幾年生了多少省儉的法子、一家子大約也沒個不背地裏恨我的、我如今也是騎上老虎了、雖然看破些、無奈一時也難寬放；二則家裏出去的多、進來的少。凡百大小事仍是照着老祖宗手裏的規矩、卻一年進的產業又不及先時、多省儉了、外人又笑話、老太太太太也受委屈、家下人也抱怨刻薄、若不趁早兒料理省儉之計、再幾年就都賠盡了。(第五十五回)

おまえ（一平兒）も知つてるように、私はこの何年かいくつかの節約策を編み出してきた。屋敷内でひそかに私を恨んでない者など恐らくあるまいよ。今じゃ私も虎にまたがったつ

て所で、わかっちゃいるんだけど、いかんせん急に手綱をゆるめるわけにもいかぬ。次にお屋敷では出費は多いが實入りは少ない。大小を問わず何事もおばあさまの定められたさまりの通りにやってるんだけど、年間に入つて来る財産は昔には及ばないし、ならばと節約に走り過ぎちゃったら他所様から笑われもして、御隠居様も奥方様も口惜しい思いをなさろうし、奉公人もひどい扱いだと恨むだろうよ。さりとて、もし早いうちに節約策を講じなかつたら、もう何年か先にはすつてんてんになっちゃうわ。

確かに鳳姐自身が認めるように、彼女は「ひどく惡辣な事をやってきた」のだが、だからと言ってそうした行動が買家の經濟状態についての彼女の認識にマイナスに作用することは無い。具體的行動の結果の良し悪しをもって、その行動の基となつた彼女の認識の質を逆規定することは危険である。兩者の直線的な結びつきなど、寧ろ無いと言つた方がよからう。ともあれ、買母或いは賈珍・賈赦を始め、使用人をも含めた大方の買家の人々に手元の不如意さを歎く聲はあつても、それを家全體を視野におさめた危機意識

にまで高める力が無いのに比較すれば、鳳姐の現實認識はさすがと言わざるを得ない。そして鳳姐のこの述懐のレベルに到達し、同じく「家の崩壊」そのものとまともに關わり合った人物こそ探春に他ならないのである。「抄檢」に來た鳳姐に向かつて、彼女は次のように切り返している。

你們別忙、自然連你們抄的日子有呢。你們今日早起不曾議論甄家自己家裏好好的抄家、果然今日真抄了。咱們也漸漸的來了。可知這樣大族人家、若從外頭殺來、一時是殺不死的。這是古人曾說的：「百足之蟲、死而不僵。」

必須先從家裏自殺自滅起來、纔能一敗塗地呢。

あなたがた忙ぐことないわ、あなたがただって差し押えを受ける日が當然やってくるんですもの。甄家は自分のお屋敷内で理由も無しに差し押えをなされたんだが、果たせるかな、今回ホントに差し押えを受けてしまわれた、などと今朝方取沙汰してたじゃありませんか。わが家にもおいおい順番が廻って來るわ。こんな大きな一族って、外から殺しにかかって、一發では殺し切れないのねえ。これこそ古人の言う「百足之蟲は死すとも僵れず」です。まず家の中で自滅行爲を仕

《紅樓夢》その内なる軋み（小濱）

出かしているからこそ、一敗地に塗れるのよ。

鳳姐の病氣のあとを受けて家政の取り締まりを擔當した探春は、經濟的にはもちろん鳳姐と全く同じ悩みを抱いたに相違ない。そして新任の彼女が考えついた解決策の一つが、「敏き探春利を興して宿弊を除く」——園内の收穫物を賣り捌いて利益を得ることであった。それにしてもその利益は屋臺骨のぐらついた買家の臺所をどの程度潤してくれたのだろうか？ すかさず次のような皮肉が飛んで來る。

「三駕馬車」絞盡腦汁的如意妙算、別說是難以實現、就是實現了、又能如何？ 一年四百兩、兩年纔够買赦買一個小老婆的、三年纔够「淫喪天香樓」的秦可卿買一副棺材板子……。

「三頭立ての馬車」がおつむをしぼった擧句の手前味噌の皮算用、實現の難しいことはさておくとして、萬一實現したとしても、それで一體どうすることができてるのか？ 年に四百兩だから、二年でやっと買赦がお部屋さんを一人買え、三年でどうにか「淫りて天香樓に喪ん」だ秦可卿に棺桶板を一組



買え……。<sup>84</sup>

買家が動かす金額全體から見れば、年間四百兩の利益など確かに微々たるものでしかない。回目には「宿弊を除く」とあるが、例えば、「千兩の銀子がどれだけの足しになる、ここ二年ほどは少なくとも年に數千兩の赤字だ」(第五十三回)という内實から考えると、實際には割引いて扱ふ必要がある。従つて探春のこの思いつきは、經濟上の大改革として特筆さるべきものではなく、方向を異にしているとは言え、鳳姐が行なつてきた様々な節約策の域を越えないと考える方が穩當である。鳳姐も認める探春の才覺がそれな

りの力を發揮し、新鮮味から來る些かの安堵感を與えたという程度に止めるべきで、「探春の家をおさめる才能に對する稱贊を隠さないばかりでなく、作者は彼女に厄運を挽回する一縷の希望をも托していることがわかる」とは言い過ぎだろう。何と言つても「侯門千金」の身である探春が、買家のしたたかな大人達(無論男子も含めて)を統御して家運を盛り返すなどと夢想するほど曹雪芹が甘い人間だと

はとても信じられない。別の言い方をすれば、一少女のちよつとしたエピソードを「没落階級の最後のあがき」と書き立てる威勢の良さに、何ともやり切れない氣持を抱いてしまふのである。

ところで現狀を辨え、實務もこなせる鳳姐と探春が全く同じ立場にあるのかと言えれば決してそうではない。鳳姐の述懐が純經濟的に終始しているのに比べ、先に引用した探春の言葉には經濟的没落への憂いも含まれてはいふが、より強調されているのは、「自滅行爲を仕出かす」買家の人間(主従ともに)の自覺の無さに對する憤りだと思われる。つまり探春が家門の不振について考える時には、「買家の人間」という倫理的基準が入り込むことになるのである。そして鳳姐自身が

如今俗語説：「擒賊必先擒王」、他如今要作法開端、一  
定是先拿我開端。(第五十五回)

當節ことわざにも「賊ふん縛るには親分眞つ先」と言うわ。

あちら(―探春)は今誰かを見せしめにして事おっ始めよう

としてなさるけど、まずは私をとっつかまえてそうなさるに決まってる。

と認めるように、この點に關して二人は全く對照的である。探春にとっては鳳姐に代表される「あくどさ」を拂拭することも重要であつたと言えよう。ではそうした倫理的姿勢はどこからやってくるのだろうか？ わたしたちは探春の出自の問題に戻らなければならない。

既に明らかのように、探春の生母は趙姨娘、つまり彼女は庶子である。それは一體何を意味するのか？

鳳姐笑道：「好、好、好！好個三姑娘！我說他不錯。

——只可惜他命薄、沒托生在太太肚裏。」平兒笑道：「奶奶也說糊塗話了。他便不是太太養的、難道誰敢小看他、不與別的一樣看了！」鳳姐歎道：「你那裏知道。雖然庶出一樣、女兒卻比不得男人。將來攀親時、如今有一種輕狂人、先要打聽姑娘是正出是庶出、多有爲庶出不要的……」（第五十五回）

《紅樓夢》その内なる軋み（小濱）

すてき、すてき、すてき！素晴らしい三のお嬢さん！あちらなら間違いないと思つてたよ。——ただねえ、残念なことに天命に恵まれなくて、奥方様のお腹に生まれなかつた。

（鳳姐）

奥様も馬鹿氣たことおっしゃいますのね。あちらが奥方様のお腹でないからといって、誰があちらを見下したり、他のお方と違う目で見たりしましょうか！（平兒）

おまえに何がわかるものかね。同じくお妾腹だといっても、女子は男子と比べものにはならないんだよ。將來縁組みをする事になった時、この頃は輕薄な連中がいてき、まず相手のお嬢さんが奥方腹なのかお妾腹のかを尋ねて、お妾腹だつたらもう結構ですつてのがザラなんだから。（鳳姐）

女子が唯一社會的價值を持つと看做される（だからこそ「終身大事」なのだ）結婚に於いて嫡庶の區別が歴然としてゐるなら、庶出の女子の家に對する貢獻度は明らかに低く抑えられることになる。別の言い方をすれば、嫡出の女子を「正統」と位置づけた時、庶出の女子は必ず脇へ追いやられるのである。しかもそのことは、庶出の女子の才知

・容貌或いは人望といった個人的な要素とは全く關わりない。たとえそうした要素に優れたものを持っていたとしても、探春の場合のようにひそかに同情される度合いが深まる位がせいぜいである。他人の同情が何ら事態を變えないことは繰り返すまでもないだろう。

さて結婚をめぐる嫡庶の區別は外的規定だとして、庶出の意識は探春自身にどのような態度を取らせたのだろうか？ その答えは、買家の中樞を擔う家政切り盛り役としての彼女が生母趙姨娘と口論した條（第五十五回）に見出せるように思う。趙姨娘の弟趙國基の死亡に對し、家の子への規定通り二十四兩の銀子が下げ渡されることになったが、襲人が母を亡くした時には四十兩下げ渡された（これは外から來た者に關する規定通りである）ことを知っている趙姨娘は早速ねじ込んで來た。彼女の言い分はこうである。

這屋裏的人都躡下我的頭去還罷了、姑娘你也想一想、該替我出氣纔是。……我在這屋裏熬油似的熬了這麼大年紀、又有你和你兄弟、這會子連襲人都不如了、我還有什麼臉。

連你也沒臉面、別說我了。……太太疼你、你越發該拉扯拉扯我們。你只顧討太太的疼、就把我們忘了。……如今你舅舅死了、你多給了二三十兩銀子、難道太太就不依你！分明太太是好太太、都是你們尖酸刻薄、可惜太太有恩無處使。

このお部屋の人が皆で私の頭を踏んづけるのはまだしも、お嬢様、あなたもちよいとばかりお考えになって、私のために鬱憤を晴らして下さるべきじゃござんせんか。……私はこのお部屋で油で煎りつけられるようにしてこんな年齢とまで辛抱してまいったのです。それにあなたとあなたの弟御も生みました。それが今回襲人にすら及ばないとなると、私に何の面目がござんしょう。あなただってお顔が立ちませんわ、私なんざさておいても。……奥方様があなたのことをお氣に入りなら、あなたはもっともっと私達を引き立てて下さるべきですわ。それをあなたたら奥方様の御機嫌取りにばかりお熱でいらして、私達のことなんかお忘れなんですもの。……今あなたのおじさんが亡くなって、あなたが銀子を二三十兩餘計に下げ渡したからといって、まさか奥方様が承諾なさらぬ筈もござんすまい。奥方様はそりやもう御立派なのに、あ

なたがたが血も涙も無いおかげで、残念ながら奥方様のお情も持ちぐされ。

趙姨娘は、實の娘が家政を切り盛りする（＝權力を握る）以上、その母としてなにかの恩恵に浴するのは當然と考えている。そしてひそかな期待が裏切られた分だけ不満を露わにし、その口ぶりも次第に痛烈になってくるのだが、探春の方はあくまでねつける。

這是祖宗手裏的舊規矩、人人都依着、偏我改了不成！……我是按着舊規矩辦。說辦的好、領祖宗的恩典、太太的恩典；若說辦的不均、那是他糊塗不知福、也只好憑他抱怨去。

これは御先祖様が手ずからお定めになった古くからのきまりで、誰もが皆従っております。それをよりによって私が改めるわけにはまいりません。……私は古くからのきまり通りにやっております。やり方がいと思う人は、御先祖様の恩典、奥方様の恩典を受ければよいし、不公平だと思ふならば、それはその人が愚かで福運を辨えないのですから、勝手に愚痴

《紅樓夢》その内なる軋み（小濱）

らせておくより仕方ありません。

彼女にとって大切なのは、買家の先祖が定めたまきまりを一分の隙もなく遵守することである。情實に妨げられてきまりに外れた處置を取ることが絶対に許されなかった。だから、「本来なら二十四兩だが、今回は少々増やしてもいい」と鳳姐が傳えて来た時、彼女はひどく立腹して、「私は増やすの減らすのと勝手な裁量はしない。あちらが増やしてやろう、恩を着せてやろうというつもりなら、病氣が回復してから好きなだけ増やしてあげたらいい。」と拒絶する。鳳姐としては、探春の生母に關わる一件だからと氣を回して計らったのだろう。彼女には御先祖のきまりはきまりとして……という餘裕が見られる。この一件では見込み違いとなったが、情勢を巧みに嗅ぎ分けて事に當たる自在さは鳳姐の強味であり、またたとえこうした例外的措置に出ても、買家の中樞に位置する彼女に搖らぎは生じない。なぜなら、鳳姐の場合には行動の良し悪しに左右されないほどに、王夫人の姪として、賈璉の正妻として存在の「正統」

性が強固なのだから。

然し、探春になると事情は全く異なってくる。庶出という「非正統」性を背負って賈家に在る以上、その「非正統」性を自らの負性として把え、更に何らかの形でその負性を支えなければならぬ——その自覺こそが、先祖のきまりにあくまで固執することに象徴されるように、「賈家の人間」にふさわしい完全無缺な行動を強いるのである。

つまり賈の姓を名乗るから自分は賈家の者だでは濟まされない内的な不安定さが、そう信じ込むことのできる人々（賈姓でなくとも、嫁いで來たり奉公したりして賈家に存在する人々をも含む）以上に「賈」的であるよう強いることになる。そしてその「賈」に對するウルトラな心情が自らの外に向けられた時、彼女は「賈家の人間」としての自覺を缺いた人々に對して倫理的嫌惡感を抱かざるを得ない。それは「自滅行爲を仕出かす」人間への嫌惡感であり、「家の崩壞」の認識へ繋がっていくものである。

賈家という世界で生きていく大勢の人々の中から黛玉と探春が浮かび上がるのは、彼女達が「存在の二重性」とい

う、その世界を自己意識の内部で再構成する契機となり得る位相を保ち、しかもそれを契機となし得た、つまり賈家の内包する關係の總體を視野におさめることができたからである。賈家の中には黛玉や探春よりも遙かにしたたかに生き抜いている人々がたくさんいる。例えば、「主人が強く出れば弱く、弱そうならば強く出る」海千山千の召使い達の方が餘程「強靱」なのである。彼女達及びそれと同レベルで對應した鳳姐が見せるような、現實（強いられた關係）をあるがままに無理なく受け入れ、巧みに捌いていく姿は、もとより評價にも非難にも値しない。もしもそうした價值判斷を下し得るとすれば、それは賈家の内包する關係の總體を全的に規定する共同觀念が存在することを意味しよう。もちろんそうした共同觀念は人々の意識の底邊に澱んでいるに過ぎないのだが、探春の場合は、「御先祖の定めた規範（『賈家の人間としてあるべき姿』）に違わない」という共同觀念を自覺的に取り出すことによって、自らをもそこに含み込んだ關係の總體を視野におさめ、その全體性の中で自らの位置づけをはかり、同時に他の人々に

對しての判断（この場合非難）も下したのである。そして彼女のこうした態度に觸れた時、その場限りであるにせよ、他の人々は少なくとももうしろめたい氣持を抱いたに相違ない。<sup>89</sup>（探春の實弟賈環が何ら特筆に値しないのは、表向きは寶玉を立て、陰では彼を呪詛するという「使い分け」が、前述の召使い達の對應と同質であることによる。

そしてそのことは、探春に「該替我出氣纔是」と迫る趙姨娘や寧榮兩府の御機嫌を取り結びながら辛うじて僅かな家産を守っている賈璜・賈芸・賈芹といった周邊部の族人——この意味でその存在は二重化している——にも共通する。）

黛玉の場合は、既に述べた（註<sup>88</sup>）ように、「大觀園」（↓賈家）の日常的な變容・崩壞を他の人々のように自然過程として受け入れることができず、あくまで「大觀園」を規定した「清淨無垢」に恥じない（『寶玉を欺かせない』少女として、現實に對しておあつらえ向きに應對していくことを拒絶し、遂には「死」を以てそれを貫徹したのである。）

〈紅樓夢〉その内なる軋み（小濱）

ところで黛玉と違つて探春の場合には、庶出を負性と把握する自己意識が、「內的」強制力となつて、もともと「賈家の人間であり」ながら「賈家の人間でない」、という二重性を自覺させている。とすれば、たとえ「表向きは素っ氣なくしている」王夫人が彼女の行動を絶賛したとしても、自らの二重性に對する彼女の自覺は全く薄らがないだろう。誰よりも「賈」的に行動するということは、ただそうする以外にないという暗い意識に裏付けられていると思われる。なぜなら、どんな行動も彼女の二重性を解消しはしないのだから。そして黛玉を通じて探春の在り方を以上のように把えた時、わたしたちは漸く「賈」を「曹」に置き換える根據を得たことになる。

#### IV

曹雪芹の生年は今もって確定していない。年代的には康熙五十四年（一七一五）から雍正二年（一七二四）の間に生まれたと推測できるだけである。<sup>89</sup>そしてこの時期を曹家の歴史と絡めた時、辛うじて次のような言い回しが可能に

なる。

《紅樓夢》的作者曹雪芹、正是在清代封建統治者的這場激烈的政爭中、也是在曹家走向敗亡的年代裏出生的。<sup>(41)</sup>

《紅樓夢》的作者曹雪芹は、正に清代封建統治者のこの激烈な政爭中の、また曹家が敗亡に赴く年代に生まれた。

三代六十年の長きに亘って江寧織造職を世襲し、《全唐詩》や《佩文韻府》刊刻の詔すら受けたこともある曹家——その没落の果てに曹雪芹は立たざるを得なかった。當然のことながら、先ずは生活レベルで、「雪芹はもとより貧しくて、朝夕の食事に事缺くこともあった」というような状態を呈する。一方、過去に家門没落の傷を負い、現實の生活苦に喘ぐ彼の内的衝撃は、どのような形で《紅樓夢》執筆へ繋がっていくのだろうか？

特別是在他從貴族階級的行列被排擠出來、生活不斷跌落的過程中、接觸了封建社會的各個階層（包括一部分被壓迫被剝削的人民羣衆）、也受到了反封建的民主主義思想

的影響、不能不引起思想上的矛盾和變化、因而、對封建階級內部的殘酷鬭爭、對封建社會的階級鬭爭以及其他政治歷史現象、都有了一定程度的認識、他把它們鑄鑄在《紅樓夢》的藝術形象之中了。<sup>(42)</sup>

とりわけ貴族階級の列から排除され、生活が絶え間なくレベルダウンする過程で、封建社會の各階層（一部の被壓迫被搾取人民大衆を含む）と接觸し、反封建の民主主義思想の影響も受けて、思想上の矛盾と變化を引き起こさざるを得ず、その故に、封建階級内部の殘酷な鬭爭に對し、封建社會の階級鬭爭及びその他の政治的歷史的現象に對して、一定程度の認識をもつようになり、彼はそれらを《紅樓夢》の藝術形象の中に鑄かし込んだのである。

こうしたおめでたい把え方が決定的に缺いてしまふのは、曹家の没落が歴史の總括としては清朝封建體制の全面的解體を遙かに暗示する位置を占めるとしても、當時に於いては解體の直接的引き金とはならず、單なる抄沒事件として終るよ・う・に・見・え・る・とい・う・點・で・あ・る。曹家の没落が世間一般の人々の生活領域に抜き難い楔を打ち込んだかと言えば、

全く否である。その事件は知っても知らなくても、覚えていても忘れてしまっても一向に構わない。従って曹雪芹がそこから何を背負い込むかなど、人々には一層何の關わりも無いのである。(もちろん大部分の人々がそうであったように、曹雪芹の存在すら知らなくてもいい。) これこそそれが曹雪芹の生き抜かねばならぬ情況なのである。例えば、現代日本のある詩人がこう語るように。

わたしのけちな自己史にとって、五十年代の末から六十年代にいたる難問が、思想的な原點であると呼ぶことができる。とすれば、どんなばかな目にあっても、それに生涯固執せざるを得ないという、もの狂いめいた想いと、一方でわたしの背中を確實に貫いていく、この(一世間の)轉變の凄さとの落差は、まったく眼もくらむほどだと言っていると思います。(傍點原文)

現在の自分を結果の一つの現われとして見据えながら、家の崩壊過程を再構成していく、それによって自らの存在

《紅樓夢》その内なる軌み(小濱)

そのものを照射していく——現實の窮乏した生活を寧ろ無化するような形で《紅樓夢》の執筆は續けられている。<sup>45</sup> それにしても、没落の果てに立つ自分——そこへ通じる暗渠を何度も何度も辿り直すことと、自分もその暗渠をも無表情にうち棄てていく世間の轉變との「落差」は深まる以外にない。自分にとっては譬え様もなく深刻な衝擊も、それに對するどんな意志表示も空を切るしかないのである。<sup>46</sup>

「家の崩壊」を自らの基底に位置づけた時、江寧織造曹家と曹雪芹とは最早單純には繋げられないように思われる。曹雪芹がその曹家の系圖に練り込まれるためには、「曹」という表面的な一致の背後で「家の崩壊」の重みを支え切る苦闘が必要であった。然し、その苦闘から解き放たれる時は訪れるのか? それは恰かも探春が完璧な「賈」的行動を志向しながら、一方で完璧さを自己否定せざるを得なかったように、何度書き直しても辿り直してもなお未踏の部分が残っていると感じざるを得ない闘いだと言えよう。「勝つ」のではなく「負けない」闘い——解き放たれることは恐らくあり得ない。それを強いるのは皮肉にも自分



身なのである。

「曹」という名を斬り捨てることも、名以外に何物かを附加することも許されないならば、全てを失って名のみ残っていく過程をくぐり抜けた地點に自分を位置づけるしかない。そして「くぐり抜ける」という曹雪芹のこの意識的作業は、その成果である《紅樓夢》の中に二種類の形で沈め込まれている。すなわち、一つは黛玉の死であり、一つは「家の崩壊」に對する探春の予見である。もちろんストリー自體の展開に於いても、兩者ともに大きな比重をもっていることは言うまでもない。然し、それとは全く別の次元の問題として、「大觀園」の日常的解體への順應を拒み通した黛玉の死は、世間の轉變との「落差」に對して決して自分の方から歩み寄るような眞似はしないという曹雪芹の決意を孕んでおり、また買家の崩壊過程そのものに身を置く探春の予見は、「家の崩壊」に對して最早自らの内部で認識を鋭くしていく外にない曹雪芹の沈潜を擔っているのである。曹雪芹の姿勢として、黛玉の死は「斬り捨て」の拒絶、探春の予見は「附加」の斷念という意味をも

つと言えよう。自分が「曹」であること、しかも没落した「曹」であることだけが、曹雪芹にとって問題となつたのである。とすれば、兩者は買家没落後の個々人の運命<sup>40</sup>という羅列された悲惨さを突き抜けてしまう。なぜなら、「家の崩壊」の結果としてのそうした悲惨さを現に味わいながら、敢て崩壊過程にまで踏み込み、その息苦しさに耐えていくことにこそ、曹雪芹が《紅樓夢》に拘わり續けた最大の理由が存在するからである。

小説として文章化された「買家の崩壊」が、逆に曹雪芹の手練り寄せた「曹家の崩壊」を照射し、それによって生ずる曹雪芹の認識の深化が再び表現の世界の血肉となるといふ、作者と作品との間の作用反作用の繰り返しが、《紅樓夢》の小説としての質を高めていった——彼の背負い込んだ、情況が彼に發言や行動を迫ることもなく、彼の何らかの意志表示が情況を突き動かすこともないという時代の重みを推し量りつつ、未完の小説と臍氣な生の軌跡を残して逝つた曹雪芹に對し、最大級の讃辭を贈りたい。

## 〔補記〕

テキストには愈平伯校訂《紅樓夢八十回校本》を用いた。

## || 註 ||

- (1) 愈平伯「前八十回紅樓夢殘缺的情形」(「紅樓夢研究」所收)
- ① 本文底殘缺
- ② 毎回の起迄並不會完整
- ③ 回目各本互異、都不很妥善、表示作者未能定稿
- ④ 除回目的文字做得不太妥當以外、還有一種情形、就是缺失回目
- ⑤ 分回底不定
- (2) 「仍因之」については、伊藤漱平氏「紅樓夢首回、冒頭部分の筆者に就いての疑問(續)」(「東京支那學報」第八號)及びその「訂補」(同第十號)を参照の事。
- (3) 胡適「跋乾隆甲戌脂硯齋重評石頭記影印本」
- (4) 愈平伯「影印」《脂硯齋重評石頭記》十六回後記
- (5) 胡適「其中可能有『正照風月寶鑑』一類の戒淫勸善の故事」(註(3))
- 愈平伯「從名稱也可以知道一點、大概意在戒淫」(註(4))
- (6) 註(4)に同じ
- (7) 秦可卿淫喪天香樓、作者用史筆也。老朽因有魂托鳳姐賈家

《紅樓夢》その内なる軌み(小濱)

後事二件、豈是安富尊榮坐享人能想得到者、其言其意、令人悲切感服、姑赦之、因命芹溪刪去「遺簪」「更衣」諸文。是以此回只十頁、刪去天香樓一節、少去四五頁也。(揚州靖氏藏抄本《石頭記》)

(8) 後面又畫着高樓大廈、有一美人懸梁自縊。

(9) 第五回載於秦可卿的《紅樓夢曲》第十三支「好事終」說：「擅風情、秉月貌、便是敗家的根本。」已點明她與《風月寶鑑》的關連。(註(4))

(10) 他弟兄二人(賈諧・賈蓉)最相親厚、常相共處。寧府中人多口雜、那些不得志的奴僕們、專能造言誹謗主人、因此不知又有了什麼小人詭譎諛諂之詞。賈珍亦風聞得些口聲不大好、自己也要避些嫌疑、如今竟分給房舍、命他(賈諧)搬出寧府、自去立門戶過活去了。

(11) 第十五回「秦鯨卿趣を饅頭菴に得る」

(12) 太田辰夫「《紅樓夢》新探Ⅱ」(「神戸外大論叢」16—4)

棠村作の《風月寶鑑》が別個に存在したと想定する太田氏は、曹雪芹によって徹底的に書き改められはしたが、本來棠村の手に成る人物として晴雯を擧げておられる。

(13) 不因俊俏難爲友、正爲風流始讀書。(第七回)

(14) 「風月寶鑑」稿がほぼ形を整えた頃、現本第五回の内容にかなり近い一章が、首回またはそれと遠からぬ位置に置かれるに至った。とは言え、恐らくまだ十二叙の着想も生まれておらず、従って十二叙薄冊の一節もなかったであろう。こ

の時期には、賈寶玉が夢中、太虛幻境に遊び、そこで自分の將來に關する豫言の内容を含んだ、警幻仙姑の新作『紅樓夢』曲を聴かされ、仙姑から「意淫」に就き諭される——これがそのおおよその内容であつたのではないか。」(伊藤漱平「金陵十二釵と『紅樓夢』十二支曲」大阪市立大學「人文研究」19—10)

とすれば、警幻仙姑の寶玉に對する訓え、「不過令汝領略此仙閣幻境之風光尙然如此、何況塵境之情哉！而今以後、萬萬解釋、改悟前情、留意於孔孟之間、委身于經濟之道。」も、

(15) 「秦可卿淫喪天香樓、作者用史筆也。」からこうした事件そのものが曹雪芹にとっては看過すべからざることであつたと考えられる。

(16) 先行作品の模倣・攝取段階という意味では『水滸傳』と『金瓶梅』の影響下にある。註(14)論文參照。

(17) 「秦可卿的故事應是舊本《風月寶鑑》中的高峯。」(註(4))と目される秦可卿の地位の低下にも注目したい。

(18) 拙稿「林黛玉論——日常的解體を越えんとして」(『中國文學報』第二十六冊)

(19) 「年齢のきわ立って若い巧姐が十二釵の一人に列せられるようになった一つの契機は、改稿の過程で寶玉はじめ少女達の年齢が全般に若返らせられたと推されることにも求められよう。(『風月寶鑑』稿では、いずれも「風月」色戀のことを

充分解する年頃として設定されていたはず。その戯作調が、清潔な穿圍氣の、寶玉を交えた稚い少女達の文雅な遊びを點綴する方向へ、完全にとは言えぬまでも大巾に變化したのである。それには主として寶玉に儒教批判・八股批判等々の反俗的言動をさせながら、頑でない童蒙の所業として通す餘地を作るための配慮も働いたろうと思われる。)(註(14)論文)

この「變化」は曹雪芹の創作態度の根本的變化そのものであり、寶玉の反俗的言動はそれを裏付けこそすれ、決して「變化」を配慮させる要因ではなかつたと思う。

(20) 俞氏の擧げた多渾蟲の女房及び尤二姐についても、現存する『紅樓夢』では、彼女達と賈璉との關係描寫そのものよりも、それらの發覺が「鳳姐の離縁」という結末の伏線となることの方に意味があるようだが、伊藤氏の推定(註(14)論文)によれば、この結末は『風月寶鑑』の中心的位置を占めており、その場合兩者が「『風月寶鑑』↓『紅樓夢』」の流れに呼應して伏線の役割をもつようになったとは言ひ切れない。

(註) 多渾蟲の女房については「後三十回の紅樓夢」、尤二姐については「八十回後の紅樓夢」(共に俞平伯「紅樓夢研究」所收)を參照の事。

(21) 全書百回乃至百十回を豫定していたことが脂批(『有正本』第二回前總批及び『庚辰本』第二十一回前總批)を通じて知られる。

本稿執筆後、全書百八回(九回單位の十二部立)説に接す

ることができた。(周汝昌「紅樓夢」原本は多少回?)《社會科學戰線》78年1期吉林人民出版社)非常に興味深い提示である。なお百八回(十八回單位の六部立)説は已に提出されている。(加藤知彦「紅樓夢の構成について」中國文學報 第四册)

(22) 探春冷笑道：「我們的丫頭自然都是些賊。我就是頭一個窩主。既如此、先來搜我的箱櫃、他們所偷了來的、都交給我藏着呢。」說着、便命丫鬢們把箱一齊打開、將鏡奩・妝盒・衾袱・衣包、若大若小之物、一齊打開、請鳳姐去抄閱。

「矢孤介杜絕寧國府」——惜春と尤氏が不仲になったのも「抄檢」が原因である。

(23) 須看種種世態炎涼、世俗嫁娶未有不重財者。黛玉父母早喪、孑然一身、寶釵母兄俱存、家貴尚厚、賈政之取寶而捨黛玉宜矣。即史太君・王夫人、亦皆不免世俗之見、鳳姐但能巧爲迎合、不能強爲轉移也。或以拆散姻緣、專歸咎於鳳姐、其於世故人情、未曾思之爛熟矣。(周春「閱紅樓夢隨筆」)

(24) 西園主人「紅樓夢論辨」

(25) 趙姨娘と同じく賈政の側室。但し子供は無い。その名が擧がるのは、次のような言葉に印象づけられてか?

(探春便説)「何苦自己不尊重、大吆小喝、失了體統。你(趙姨娘)瞧周姨娘怎不見人欺他、他也不尋人去。(第六十回)

(26) 「沒落階級的垂死掙扎」上海人民出版社「封建末世的形象

《紅樓夢》その内なる軋み(小濱)

「圖畫」所收

(27) 西園主人は次のように解釋している。

豈眞不知有母哉? 觀其哭向生母趙姨云：「幸而太太待我尚如己出、必要弄到大家一樣」之言、其心不慨然可見乎? 又云：「我只知有老爺太太」、明以云我係老爺所生、雖爲庶出、較之王熙鳳總親※、話中有話也、非只知有父而不知有母也。

※「跟王熙鳳比較起來、總是來得親一些」の意  
(28) 例えば、第三十五回には

這裏林黛玉還自立於花陰之下、遠遠的卻向怡紅院內望着、只見李宮裁・迎春・探春・惜春並各項人等都向怡紅院內去過後、一起一起的散盡了、只見鳳姐兒來、心裏自己盤算道：「如何他不來瞧寶玉? 便是有事纏住了、他必定也是要來打個花胡哨、討老太太和太太的好兒纔是。今兒這早晚不來、必有緣故。」一面猜疑、一面擡頭再看時、只見花花簇簇一羣人又向怡紅院內來了。定睛看時、只見賈母搭着鳳姐兒的手、後頭邢夫人王夫人、跟着周姨娘並丫鬢媳婦等人都進院去了。黛玉看了、不覺點頭、想起有父母的人的好處來、早又淚珠滿面。

(29) 秦可卿の靈が王熙鳳の夢枕に立ち(第十三回)、「還有一件心願未了、非告訴嬌嬌、別人未必中用。」と前置きした後で、「便敗落下來、子孫回家讀書務農、也有個退步、祭祀又可永久。」のための先を見越した手を打つように忠告したことは、一つの證左となろうか。

(30) 第五十六回回目

(31) 嚴石「評『三駕馬車』執政的破產」(原載《遼寧大學學報》哲學社會科學版一九七四年第四期、一九七五年上海人民出版社「紅樓夢評論集」所收)

(32) 直接的には李執・探春・寶釵を指すが、眞の狙いはクレムリンの「トロイカ體制」(ブレジネフ・コスイギン・ポドゴルヌイ)にあると思われ。とすれば、七七年春のポドゴルヌイ失脚は當然か?

(33) 只得又各處遣人購求尋覓、終久費了八百兩銀子、買了一個十七歲的女孩子來、名喚嫣紅、收在屋內。(第四十七回)

(34) 棺桶板の値段については

薛蟠道：「拿一千兩銀子來、只怕也沒處買去。什麼價不價、賞他們幾兩工錢就是了。」(第十三回)

しか該當箇所は見當たらぬ。現在通行している《程乙本》底本の百二十回排印本でも事情は變らないので、論者の解釋にはズレがあると思われる。同回の捐官(千二百兩で龍禁尉を買う)の方が無難だが、ただ皮肉の効果の點から言えば、棺桶板には及びそうにない。

(35) (鳳姐)按正理、天理良心上論、咱們有他這個人(——探春)幫着、咱們也省些心、於太太的事也有些益、若按私心藏奸上論、……他出頭一料理、衆人就往日咱們的恨暫可解了。

(第五十五回)

(36) 李希凡・藍翎「曹雪芹的世界觀與現實主義創作」(「紅樓

夢評論集」所收)

(37) 王夫人便覺失了膀臂、一人能有多大的精神、凡有了大事、自己主張；將家中瑣碎之事、一應都暫令李執協理。李執是個尚德不尚才的、未免遲縱了下人、王夫人便命探春合同李執裁處。(第五十五回)

鳳姐が「名實」ともに申し分ないとすれば、李執は「名」を、探春は「實」を引き繼いだことになる。形としては李執の傍に探春がいるのだということを忘れるべきでない。

(38) 他雖是姑娘家、心裏卻事事明白、不過是言語謹慎；他又比我知書識字、更利害一層了。(第五十五回)——鳳姐が探春を評した言葉である。家政の切り盛りは「實戰」なのだからあくまで「腕」の勝負だと言えるが、鳳姐が「知書識字」に拘わったのは、知的上昇のもたらす「かくあるべし」という原則論を探春が振り翳して迫って來ることを恐れた——それが切り盛りの実績でなく、切り盛りの態度を問題にする以上、必ず自分が「見せしめ」になる——からである。召使いの身になって考えれば、探春の出現は具體的對應と原則論による二重の締めつけ(更利害一層了)を意味しよう。又向かうことはできないが、つき合える代物でもない——鳳姐は、「倘或他要駁我的事、你可別分辯、你只越恭敬、越說駁的是纔好。千萬別想着怕我沒臉、和他一強就不好了。」と平兒に言いつけ、まんまとこの「危機」を乗り切った(探春に「不但沒了氣、我倒愧了、又傷起心來。」と言わせた) ようであ

る。

(39) 曹雪芹の生年推定は卒年からの逆算に頼っている。卒年は乾隆二十七年除夕（一七六三年初）或いは翌年の除夕であり、逝世時の年齢については次のような資料がある。

① (A) 四十蕭然太瘦生

(B) 四十年華付杳冥

(教誠「輓曹雪芹」)

吳恩裕氏は(A)を初稿とされる。(「有關曹雪芹八種」)

② 其人……年末五旬而卒

(張宜泉「傷芹溪居士」自註)

また曹雪芹の生年推定に際しては、彼が曹顥・曹頌いづれの子であるかという問題も絡んでくる。伊藤漱平「脂硯齋と脂硯齋評本に關する覺書(二)」(「人文研究」13―8)、趙岡・陳鍾毅「紅樓夢研究新編」等を参照の事。

(40) 順治十一年(一六五四)

女輝(後の康熙帝)誕生。曹寅の母孫氏が乳母となる。

順治十五年(一六五八)

曹寅誕生。

康熙二年(一六六三)

曹璽(寅父)江寧織造に任ぜらる。

康熙二十三年(一六八四)

六月曹璽没。「是年冬、天子東巡、抵江寧、特遣致祭、又奉旨以長子寅仍協理江寧織造事務、以續公緒。」(于成

《紅樓夢》その内なる軼み(小濱)

龍《江寧府志》)新たに江寧織造となった桑格赴任後の翌年五月、曹寅は内務府慎刑司郎中として京師へ。

康熙二十九年(一六九〇)

曹寅蘇州織造に任ぜられる。

康熙三十一年(一六九二)

曹寅江寧織造を兼任。翌年、李煦(寅内兄)が蘇州織造に任ぜらる。

康熙五十一年(一七二二)

七月曹寅没。十月曹顥(寅子)江寧織造に任ぜらる。

康熙五十四年(一七一五)

正月曹顥没。曹頌(寅姪、過繼)江寧織造に任ぜらる。

雍正元年(一七二三)

李煦抄没さる。

雍正五年(一七二七)

李煦、阿其那(雍正帝の弟胤禛)との通交(李煦買蘇州女子送給阿其那)のかどで打牲烏拉(吉林省)へ流さる。

十二月二十四日(既に一七二八年)、曹頌の家産を查封せよとの上諭が出される。

雍正六年(一七二八)

七月、曹頌は塞思<sup>サス</sup>(雍正帝の弟胤禛)のために鍍金の獅子を預っていた、との江寧織造隋赫徳の奏摺あり。

※康熙二十三、四年の曲折した過程については、馮其庸

「曹雪芹家世史料的新發現」(《文物》76―3) 参照の

事。

※曹寅在任中、康熙帝の南巡は四度（康熙三十八、四十二、四十四、四十六年）行なわれたが、この連続的南巡の接駕にかかった莫大な費用が曹家没落の大きな要因となつたのである。

(41) 李希凡「《關於江寧織造曹家檔案史料》前言」

なおこの「前言」は、曹家の繁榮と没落が皇帝權力といかに密切な繋がりをもっていたのか（前者は康熙帝と、後者は雍正帝と）を平明に解説している。

(42) 敦敏「瓶湖懋齋記盛」（吳恩裕「曹雪芹的佚著和傳記材料的發現」《文物》73—2）

(43) 註(41)同じ。

(44) 北川透「最も壓力のかかる場所」《傳統と現代》46「閉塞の時代」所收）

(45) ①勸君莫彈食客鉢 勸君莫叩富兒門

殘盃冷炙有德色 不如著書黃葉村

（敦誠「寄懷曹雪芹落」）

②董邦達經過了二十三年臘月二十四日之會以後、對雪芹當有較深刻的了解、因而二十四年或再遲、可能有請雪芹去皇帝的畫苑任職之事、但被雪芹所謝絕。所以張宜泉《題芹溪居士》一詩中、才有「苑召難忘立本羞」這句詩。過去由于不知道雪芹與董相識、不好推斷；對張詩也不得其解。現在有了《記盛》的記載、此一久懸的問題、遂可告

解決。（註(42)論文）

③「廢藝齋集稿」八册（註(42)論文參照）、除了第一册有關金石與刻印是中國傳統文人的技藝外、其他各項都是民間的實用技藝、可用以謀生者。然而想不到他本人竟窮困潦倒終其一生。（趙岡・陳鍾毅「紅樓夢研究新編」）

(46) 曹家の没落がどうでもいい以上、「賈史薛王」（假史專柱——史ヲ假リテ枉ヲ雪グ）という、或る意味では至極當然な創作動機（註(44)論文參照）もまた問題にされないのは自明である。だからこそ、情況がそうした動機の徹底的な無力化を迫る中で、逆に《紅樓夢》が完成されていく——その意味が問われねばならない。

(47) 俞平伯「後三十回的紅樓夢」「八十回後的紅樓夢」、平凡社中國古典文學大系《紅樓夢》(上)・岩波文庫《紅樓夢》(ハ)の解説等を参照の事。